



# HOKKAIDO UNIVERSITY

Title	シンポジウム ー中華人民共和国・台湾の50周年 ー歴史・現状・未来ー 目次
Citation	北大法学論集, 51(4), 175-179
Issue Date	2000-11-10
Doc URL	<a href="https://hdl.handle.net/2115/15028">https://hdl.handle.net/2115/15028</a>
Type	departmental bulletin paper
File Information	51(4)_p175-179.pdf



# 中華人民共和国・台湾の五〇周年―歴史・現状・未来―

主催 グローバリゼーション研究会

第一部 中華人民共和国五〇周年

開会挨拶

基調報告 建国五〇年―中国研究与中国近現代史の再検討

国分報告へのコメント(一)

国分報告へのコメント(二)

個別報告

佐々木隆生(北海道大学経済学部教授)

国分 良成(慶應義塾大学法学部教授)

高井 潔司(北海道大学言語文化部教授)

塚本 元(法政大学法学部教授)

【歴史部門】 中華民国外交史から見た現代中国―民国前期外交史からの問い―

川島 真（北海道大学法学部助教）

【法律部門】 中華人民共和国五〇年 法の観点から

鈴木 賢（北海道大学法学部教授）  
遊川 和郎（北海道大学言語文化部助教）

【経済部門】 中国経済の現状とWTO加盟による影響

第二部 台湾の五〇年  
基調報告 「今台湾とは何か」をどう考える？

若林 正文（東京大学大学院総合文化研究科教授）  
孫 安石（北海道大学法学部講師）

若林報告へのコメント

個別報告  
【法律部門】 現代台湾における法の本土化―「中華民国在台湾」法から台湾法への転換―

鈴木 賢（北海道大学法学部教授）

【歴史部門】 戦後台湾外交の出発点―中華民国としての対日戦後処理外交―

川島 真（北海道大学法学部助教）

あとがき

開会挨拶

佐々木 隆 生（北海道大学経済学部教授）

グローバルゼーション研究会は、かつてミネルバ書房からその成果を、『ヨーロッパ統合の脱神話化』というかたちで出版した際の研究グループを土台としている。このグループは、中村研一・北海道大学法学部教授、遠藤乾・同助教、授や清水一史・九州大学経済学部助教授、安藤研一・静岡大学助教授らを中心メンバーとしているが、その後枠組みを拡大して研究することが企図され、今日に至っている。現在は、ポスト冷戦のグローバルな諸関係の変動にスポットを当て研究を行なっているが、特にアジアについては今年度から川島真・北海道大学法学部助教授を迎え、活動が充実してきている。一九九九年の五月十七日には遊川和郎・言語文化部助教授の助力の下、「通貨危機と東アジア」と題するシンポジウムを、北海道大学研究会参加者を中心に開催した。今回のシンポジウムはそれに続くものであり、川島助教授を企画組織責任者とし、北海道大学に限らない多くの研究者を迎えてのシンポジウムを開催することとなった。

ところでアジアは、今日のグローバルな諸関係の変化の視点から見れば不可欠なファクターとなっている。その意味については様々な視角から考えられるが、筆者は大きく三点あると考えている。一つには、アジア太平洋には、経済的

には三極の一つ、すなわち世界のGDPの十五パーセントを占める日本が存在しているということ。また政治的には、米中ロシアという核軍勢力を有する常任理事国三か国が関係しているということ。第二番目に、これらの間に築かれる多極的な諸関係がある。冷戦下については、東西冷戦とアジア冷戦とに分けて論じることが適當と考えているが、この時期については国家間関係が多極的とはいっても、それほど複雑な様相を呈しているわけではなかった。しかし、今日では政治経済の諸運動が二国間関係だけでなく、多角的な諸関係によって強く規定されるようになってきている。これが意味するところは複雑だが、多極化という事実は確かであろう。第三は、本研究会の問題意識の出発点にあるだが、このように多角的に形成されているの東アジアの諸関係を安定させる枠組なり、レジームなりが存在しないということである。キッシンジャーは、アジアを十九世紀的な勢力均衡体系段階にあると述べており、日本研究者として著名なケント・カルダーは、アジアの不安定性を強調し、冷戦後も安保体制を軸にすることを主張している。こうしたことを考えると、諸国の内的な圧力と共に諸国を否応なしに動かしていく国際経済関係の分析と、それに基づく適切な提示をおこなうことこそ、我国の社会科学者の必須課題なのではないかと筆者は考えている。さらに、これらを研究していく際に、中国、更に台湾、シンガポール等を含めて重層的に配置されている中華圏としてのアジアの問題が重要になることは言うまでもない。

ところで、中国に対する日本の研究のアプローチは、冷戦下にあったある種の禁忌・タブーを離れ、他方で戦後の歴史政治研究の蓄積を土台にして非常に大きく変わろうとしているように筆者には思える。筆者は世界経済の研究者で、到底中国の近現代史については知るところではないが、傍目から見てもそう感じる。これまでの中国研究は、漢籍から得る知性に基づいて、ある憧憬を伴いながら研究するとか、あるいは西洋から輸入してきた社会科学に基いた、ある意味でネイションステイトⅡ国民国家としての完結した社会単位というものを土台に見る視角から研究をおこなうとか、あ

るいは中国という魔力をもった吸収力と戦後の中国共産党の戦略に影響を受けながら研究するとか、色々な回路があった。だが、いずれにしても中国がある意味では孤立して内的に扱ってきたという感がなきにしもあらずであった。しかし今日、冷戦下でのタブーがなくなり、歴史研究などにおいて非常に大きく視角が変わってきたという前提の下に、アジアの多角的関係の中で中国を読み返そう、あるいはグローバルな関係の中で中国を読み返そう、見直そうという大きな研究のうねりが出てきているように思う。そしてそれは同じく対外関係を担保としてある意味で自分の社会を考えてきた日本の経済研究にも反映しつづつあると考えている。

こうした意味で、今回のシンポジウムが単に中国近現代史あるいは中国経済、中国政治を研究する者だけでなく、広く現代の同時代の社会の宿命を担おうとしている多くの研究者にとつて意味深いものになるだろうと確信している。二日間にはわたり中国・台湾について研究会がおこなわれるが、これは学界全体を見回しても、ある意味で珍しいワークショップになるだろうと思う。そしてこうしたシンポジウムがこの地の研究に大きな財産を残すことを期待している。